

明治初期女紅場における手芸裁縫教育

知野 愛 (郡山女大)

【目的】明治5年に新英学校及女紅場が設立されて以来、京都大阪を始め函館・新潟・大分など各地に女紅場が設立された。女子に必要とされた技芸、女紅(裁縫・紡績・刺繍・養蚕・織物等)を教授することを主目的としたが、同年布達の娼妓解放令に関連し、娼妓廃業後のため技芸を教授する遊所女紅場や、没落士族の貧困婦女子への授産施設等も含まれる。学制確立期の明治初期に、女紅場という機関において実施された手芸裁縫教育の内容を、授業科目・教則・製作品・教師資格等の面から、資料に基づき調査し比較検討することを目的とする。

【方法】資料として、各地に残る諸届書等の行政文書など一次資料を中心に用いる。

【結果】新英学校及女紅場では、英学生徒と女紅生徒に分け、外国人教師による西洋女紅の教授も実施、1週33時間のうち女紅が9時間、その他に読書数学作文習字女礼があった。柏崎女紅場では裁縫と機織、長岡女紅場では裁縫機織の他に養蚕を取り入れ、函館女紅場では裁縫科と洗濯科が置かれた。教師資格は、京都府の場合明治11年の「市郡女紅師規則」により土手町女紅場で3級以上の試験に合格することを資格要件としたが、その地域の裁縫教師や女性仕立師に依頼した例も見られた。製作品は、京都土手町女紅場の場合、織物や袋物、糸織地煙草入れが米国博覧会に出品され、京都府女紅場として、華族士族娘による衣服雛形、生徒娼妓による押絵額が出品されている。一方、新潟県内女紅場では開場から約7年で文部省から「授業に類することをなさず」と指摘されるなど、女紅場の教授内容や技術程度、経営方針にかなり差が見られる。